琉球畳(七島藺)発祥について

◆琉球畳(七島藺)はカヤツリグサ科の植物を畳表(ゴザ)を使った畳。

カヤツリグサを使うことで 1 畳でも半畳、縁あり、縁無しも全て琉球畳となり、カヤツリグサを使わないと縁無し畳、坊主畳、野郎畳等々各地で名称が異なる。

◆琉球畳(七島藺)の発祥地は約 350 年以前より当時薩摩藩鹿児島トカラ列島で監視体制のなか栽培される。

トカラ列島は「口之島」「中之島」「平島」「諏訪之瀬島」「悪石島」「小宝島」「宝島」の有人 7 島

七島藺：カヤツリグサ科の多年生草本で非常に背が高くなる。普通のイ草は断面が丸く、細かいのに対し、七島藺は断面が三角形で非常に太いのが特徴。

和名のシチトウはトカラ列島のことで畳としての利用はここが発祥と言われる。島では、筵(むしろ)やサワラの燻製を作るときの吊り紐などの生活用品用に栽培されていた。また、草履にも使用されていた。

一方村外では「琉球畳」の畳表として利用されていた。「琉球畳」は現在では縁なし畳全般を指すようになったが、元来は七島藺を畳表に使用したものの

みを指していた。またその丈夫さから柔道用の畳にも使われていた。

情報提供十島村役場

◆嘉納治五郎 講道館 柔道創設 1882 年永昌寺の敷地に建てられた道場に敷かれていた 12 帖半は、琉球畳の縁無し畳からスタートした。

◆大分県では約 350 年前に橋本五郎右衛門なるものが当時厳重体制であったトカラ列島へ忍び込み苗を命がけで持ち帰り栽培が始まったとされる。後に静岡県遠州表など生産地は広がりをみせたが、現在は大分県の生産者数件のみ。現在は生産枚数に限りがあり手に入りにくい。